〔研究ノート〕

カラハン王朝と新疆へのイスラム教の流入
――新疆イスラム教小史 ①――

丸　山　鋼　二

〔Research Notes〕

Qara Khan Dynasty and the Inflow of Islam into *Xinjiang*

Koji　MARUYAMA

【目次】

はじめに
１「新疆」と「東トルキスタン」
２ウイグル（回鶻）の西走とカラハン朝の建国
３サトゥク・ボグラ・ハンの改宗
４ムーサ・アルスラン・ハンによる強制改宗
５イスラム教対仏教の第一次「宗教戦争」：ホータン征服
６高昌仏教王国に対する第二次「宗教戦争」の失敗
７カラハン朝のトルコ・イスラム文化
おわりに

Abstract

Xinjiang means "New Frontier", named by the Qing Dynasty in 1884. Uygur people, the main inhabitants of Xinjiang area, prefer using the name of Eastern Turkistan to Xinjiang. Their belief is Islam. This paper researches how Islam flowed into Xinjiang area. Islam began to be spread in Xinjiang area in the 10th~11th centuries. Kashgaria, the western Xinjiang area was the first area where Islam spread. Kashgaria was the center or capital of Qara Khan Dynasty.

The way the local people accepted Islam is different from the way in other parts of China. The nobles were converted to Islam firstly, which is known as the conversion episode of Satuq Boghra Khan. The nobles often preached Islam to the ordinary people and forced them to accept the belief. This resulted in a religious war between the Islam dynasty of Qara Khan and the Buddhism dynasty of Hotan lasting about one hundred years. Hotan and Yarkand, the southern Xinjiang thus became Islamic region. But their second religious war against the Buddhism dynasty of Gaochang(also called the Western Uygur Dynasty) at the eastern Xinjiang (Turpan basin) failed.

はじめに

今日、中華人民共和国の新疆ウイグル自治区の主要な宗教がイスラム教であることは広く知られている。新疆イスラム教史は、（1）カラハン朝による新疆西部へのイスラム教の伝播・流入、（2）東チャガタイ汗国期の大量流入・定着、（3）ヤルカンド汗国におけるスーフィズムの発展、（4）カシュガル・ホージャ家族による南疆統治、（5）清朝後期のムスリム大反乱、（6）中華民国期の汎イスラム主義の流入と「東トルキスタン」意識の高まり、（7）新疆ウイグル自治区としての国家統合と民主改革、と時期区分をすることができる[注1]。本稿は新疆イスラム教史研究の一環として、イスラム教が「新疆」にどのように流入し定着していったのか、その過程をさぐるために、まず第一期である「カラハン朝による新疆西部へのイスラム教の伝播・流入」について検討しようとするものである。

1　「新疆」と「東トルキスタン」

まず「新疆」という言葉について説明しておく必要があろう。「新疆」という呼び方は今日的な名称であって歴史的呼称ではないが、本稿においては現在の中華人民共和国の一級行政区である「新疆ウイグル族自治区」という行政区画の範囲をさす地理的呼称として使用する。清朝末期の1884年（あるいは1882年・光緒８年）になって、この地域が中国（清国）に正式に省として編入された際に、「新しい国土」という意味で“新疆”と名付けられたのがその始まりである。したがって、当地の主要な住民であるチュルク系ムスリムにとって、「新疆」という呼び方は他律的な呼称である。

今日新疆ウイグル自治区に居住する主要な民族であるウイグル族（722万人、47.3%：1991年）は、言語的にはアルタイ語族チュルク（トルコ・突厥）語派に属し、９世紀頃から北辺より移住してきたトルコ系の民族（当時は「回鶻」と呼ばれていた）がタリム盆地のオアシス都市の先住民であったアーリア系住民と混血・融合するなかで彼らをトルコ化しながら形成されたものである。したがって、ウイグル族は中央アジアのトルコ系民族と同じであることを強調して「東トルキスタン」Eastern Turkistanという呼称を好む。

トルキスタン（トゥルキスタン Turkistan、ロシア語ではトルケスタンTurkestn）とは、「トルコ人の土地」を意味するペルシア・トルコ語で、狭義では中央アジアといわれる地域をさすが、トルキスタンは通常、北部パミール高原を境に東西に分けられ、地勢上はほぼ東トルキスタンがタリム盆地、西トルキスタンがトゥラン低地（マー・ワラー・アンナフルやフェルガナ盆地）にあたる[注2]。いずれも、北方のジュンガリアやカザフスタンの草原に対して、水があるところにオアシス都市が形成され、古来、東西交通の要路として発展したため、北方遊牧民の脅威と中国・イラン両王朝の経略を受けることが多かった。

新疆の地理は大きく、新疆の南半を占めるタリム盆地と北半を占めるジュンガル平原の２つの部分に分けられ、これに新疆の東部に位置する「ハミ（哈密）地区」を加えて、３つの地域から構成されているといえる。

まず、新疆北部に相当するジュンガル平原は、天山山脈北方の牧地で、ヨーロッパ人はここを「ジュンガリアJungaria」と呼んだ。「ジュンガル」という地名は、かつて17世紀から18世紀中期にかけ

（注1）馬品彦、趙栄織著『新疆宗教史略』烏魯木斉・新疆大学出版社、2001年、および李進新著『新疆宗教演変史』烏魯木斉・新疆人民出版社、2003年（2005年再版）を参照。

（注2）梅棹忠夫監修『世界民族問題事典』平凡社、1995年、800頁。

てここ天山山中のイリ地方を幕営の地としたオイラート・モンゴル族の遊牧国家「ジュンガル（准噶爾）部」から命名されたものである。ここは短草原と砂地がいりまじった荒野をなし、その北方に広がる大草原のステップ地帯とともに、古来より遊牧騎馬民族の発祥地・根拠地となった天然の大遊牧地帯である。

これに対して、タリム盆地は、南を昆侖（クンルン）山脈とカラコルム山脈、北を天山山脈、西をパミール山脈という高山に囲まれ、わずかに東方のハミ地区が甘粛回廊（河西回廊）でもって黄河上流域と中国本土につながる、典型的な内陸乾燥地帯の一つである。この盆地の南北にある山脈の山麓では、雪解け水によるオアシス集落やオアシス都市が形成されているが、中央の大部分はタクラマカン（「塔克拉瑪干」）と呼ばれる大砂漠である。山麓から流れる河川のうち、カシュガル河・クリヤ河・ニヤ河・チェルチェン河のように、多くは砂漠中に消滅し、ただホータン・ヤルカンド・アクスを流れるものだけが合してタリム河となり、北辺を東流してロプ＝ノール（ロプ湖「羅布泊」、Lop Nur）に流入する。

タリム盆地地域はそれまで秦漢・隋唐以来「西域」と呼称されることが多く、清朝時代はイスラム（回教）化した住民ということから「回疆」、あるいはイスラム教徒（「回回）の部落という意味で「回部」と呼ばれていた。盆地の北縁と南縁はシルクロード時代、それぞれ「西域南道・北道」と呼ばれていたが、ロプ地域の著しい乾燥化により西域南道が消滅し、天山山脈以北が新しいシルクロードのルート（「天山北路」）として開拓されると、タリム盆地地域は「天山南路」（旧「西域北道」）と呼ばれるようになった。のち1755～60年に乾隆帝の清朝軍がこの地を完全に征服すると、タリム盆地とジュンガル平原はそれぞれ「回部」「準部」と呼ばれて、藩部として編入され清朝政府の理藩院の管轄するところとなった。その時に、この両地方は新しく開拓した領域という意味で「新疆」とすでに名付けられていたが、1884年に「新疆省」（省都＝迪化［今日のウルムチ］）となるまでは、新疆南部のタリム盆地地域は「天山南路」よりもむしろ「回部」という名称の方が一般的に使用されていた。

トルキスタン地域の最終的な歴史としては、東トルキスタンは清朝の「回部」「新疆」として、西トルキスタンはロシア帝国「トルキスタン省」として支配された。ロシア革命後に西トルキスタンは、「トルキスタン自治ソヴェト社会主義共和国」(1918年成立)をへて、1924年10月、中央アジアの民族的境界画定によってソ連邦構成国としてのトルクメン共和国（現トルクメニスタン）、ウズベク共和国（現ウズベキスタン）、タジク共和国（現タジキスタン）などに民族的に再組織された[注３]。

他方、東トルキスタンは今日「新疆ウイグル自治区」として、中華人民共和国に強く結合されている。そのため、中国政府は「東トルキスタン」という呼称をイスラム原理主義やテロ過激派と結びつけ、ウイグルの独立を主張する「祖国分裂主義者」と非難したりして、厳しく弾圧を加えている。

２　ウイグル（回鶻）の西走とカラハン朝の建国

イスラム教は、中国では「大食教」「天方教」「回教」「清真教」などと呼ばれてきた。７世紀初めにアラビア半島でイスラム教が創始されてから、同世紀が終わるまで（唐の高宗時代）にはイスラム教は中国内地に伝えられていた。また、７世紀後期には、アラブ軍は「聖戦」の旗を掲げて中央アジアに侵入を開始しており、アラブ人による中央アジア征服に伴ってイスラム教が当地の主要な宗教となっていった。それにもかかわらず、イスラム教が中央アジアから新疆地域に流入したのは10世紀頃で、中国の王朝では五代十国（907～979年）から北宋（960～1126年）にかけての時代であった。イ

（注３）梅棹忠夫監修『世界民族問題事典』平凡社、1995年、800頁。

スラム教の伝播は中国内地と比べて約２世紀も遅かった。それは、祆教（ゾロアスター教）や仏教、マニ教などはまず新疆に伝えられ、そこから中国内地に再び伝来していったという流入過程とも大きく異なっていた。

その主な原因は、アラブ軍が唐朝軍と突厥遊牧国家から侵入を阻止されたため、それまでは武力でもって布教を進めてきたイスラム教がそれ以上さらに東には進むことができなかったからである。また、中央アジアに登場したイスラム王朝化したサーマーン朝とカラハン朝の２つの政権はそれぞれ「宗教戦争」（イスラム聖戦）を開始するも、その「聖戦」はたびたび頓挫させられたために、イスラム教の新疆への流入が遅れたからでもあった。

新疆のなかで最初にイスラム化したのはカシュガルであったが、それに決定的役割を果たしたのがカラハン朝であった。カラハン朝は中央アジアのトルコ化・イスラム化を促進したと、その歴史的意義をつとに指摘されるところである。そのカラハン朝の建国にはウイグル人が中心的に関わっていたとされる。

ウイグル人が「回鶻」「回紇」として歴史に登場するのは、744年に東突厥帝国の支配下にあったヤグラカル氏の懐仁可汗が九姓鉄勒（トクズ＝オグズ）やその他の諸部族を統合し、突厥に代わって漠北（モンゴル高原）に遊牧国家「ウイグル帝国」（回鶻王国）を建てた時であった。ウイグル帝国では、ソグド商人が国政に関与し、その関わりでウイグル帝国はマニ教をも導入し、国教化していた（763年）。ウイグル帝国は約１世紀ほど継続したが、840年に天災・内乱に加えて、バイカル方面にあった同じトルコ系のキルギス人の急襲を蒙り、国人（部衆）は四散し、ウイグル帝国は崩壊した。

ウイグル帝国下にあった部族のなかで、13部10万人あまりが唐の北辺に南下し、別の15部は西走したという。西走派の中からは、(１)河西に入った「甘州回鶻」（沙州回鶻）はヤグラカル氏の王が1026年まで国を保った。(２)他の大部分はエディズ朝の正系とともに天山方面に移り、10世紀初めにビシュバリク（北庭、現在のグチェン）に新王国「西ウイグル王国」をつくった。(３)さらに西走して、カルルク人の拠点であったセミレチエ地方のベラサグン方面に向かったウイグル国人もあり、カラハン朝の建国に関わったとされる。

西ウイグル国王は「獅子王」（アルスラン・ハン）と称し、また古代トルコ族君主のカリスマ的称号である「イディクート」(iduq qut、「神の恩寵」の意)とも称していた。ウイグル人は北庭から天山山脈を越えて南下し、866年吐蕃をトルファン盆地から追い出して、高昌城を占拠し、その領域を天山南北に広げた。この国は「高昌回鶻」(「和州回鶻」「アルスラン回鶻」）と、中国の五代・宋の史書には記されている。この国は新疆東部一帯を領したが、その領域は西の亀茲（クチャ）にも及び、これは「亀茲回鶻」とよばれる。これらの新しいウイグル諸国を総称して「西ウイグル王国」と呼ぶが、さらに西方の領土を含むより大きな領域を持ったと見る人もいる。西ウイグル王国はいくつかのハン国あるいは都市国家から緩やかに構成されていたとみるのが歴史の事実に近いであろう。

ウイグル人はタリム盆地のこうしたオアシス都市になじみ、シルクロードの東西貿易の商利をにぎるとともに、これまでの遊牧生活から農耕にも従事するようになった。また、宗教的にはマニ教のほか、キリスト教や仏教を受容して、インド＝ヨーロッパ語族（印欧語族、アーリア系）の原住民と混住し、彼らをトルコ化させた。ここに「トルキスタン」の形成が開始されたのである。

チベット語から翻訳されたウイグル文字の仏典写本類や寺院跡の壁画などが多数発見されており、西ウィグル王国が多様かつ高度な文化を築いていたことが知られる。981～984年に天山東部の西ウイグル王国に派遣された王延徳の帰国報告『高昌行紀』によれば、高昌城内には仏寺が50余座あったといい、また漠北以来のマニ教の寺院の存在も伝えている。トルファン盆地のベゼクリク千仏洞はウイ

グル時代の仏教遺跡で、高昌回鶻王国で仏教が流行していたことが知られる。

西ウイグル王国はチューChu河畔のベラサグン地方をもその所領に加えたことがあった。カラハン朝（約940～1211年、Qara Khan,「喀拉汗王朝」）の起源には異説や不明な点が多いが、おそらくこのベラサグン地方に興り、領地を西方と南方に拡大したと思われる。プリツァクの説によると、840年ウイグル帝国が崩壊すると、その支配下にあったカルルク部族連合体が独立、チュー河畔のベラサグンを本拠に新王朝を開いたとされる。カラハン朝は10世紀初め頃に、「西ウイグル王国」に属するひとつの汗国として勃興し建国されたと思われる。カラハン朝が「回鶻新王国」とか、「葱嶺（パミール）西回鶻」とか呼ばれるのは、そうした事情を反映しているからであろう。

その勃興・建国には、先ほど述べたように、西遷した一部の回鶻（今日のウイグル族の祖先）が大きな役割を果たした。すなわち、当地に移動してきた回鶻（ウイグル人）がヤグラカル一族のパトキン（「寵特勤」）のもと、居住していたカルルク（「葛邏禄」）・ヤグマ（「様磨」Yaghma）・オグズ（「烏古斯」）・チュユエ（「処月」、カザフ族か？）など古代トルコ語系諸民族を臣服させて、「回鶻新王国」を建国し、これが「カラハン朝」と呼ばれるようになった。カラハン朝という名称は近代の歴史家によるもので、イスラム資料では「ハーカイニーヤ朝」もしくは「アフラスィヤブ朝」と記されたり、別に「黒汗王朝」や「イリグ（イレク）・ハーン朝」とか「パミール西回鶻」と呼ばれることもある。

ベラサグン地方は、バルハシ湖の南方、チュー河の上流にある。のちにロシア人は「セミレチエ」（七河地方・河間地方）と呼んだ。チュー川は、西部天山山脈に源を発して西北に流れ、古く西アジア人はスイアーブ（スイ河）と呼び、唐代には「砕葉」「細葉」「素葉」と記され、後年は「吹河」「垂河」といい、今日は「楚河」という漢字が充てられている。その上流地域、今のトクマク周辺の渓谷地域は、河水灌漑の便に恵まれた農耕地帯であるとともに、東西交通上の要衝を握る貿易上の中心地でもあったため、早くから城市が栄え、唐代には安西四鎮の一つとなった砕葉城の地であり、７世紀前半には西突厥が、ついでトゥルギシュ族がここを根拠地とした。その後、９世紀頃からウイグル人の拠ったベラサグン城や12世紀に西遼（カラキタイ）がここに建国したグズオルド（フスオルド）などは、いずれもその後継都市に他ならない。14世紀中に戦乱のために滅びたらしく、以後は歴史に現れない。

カラハン朝初期の領域は、中央アジアのセミレチエ（七河流域）地方からチュー河（楚河）流域（今日のカザフスタンの一部地域やキルギスタン）から新疆のカシュガル・ホータン地域に及んでいた。カラハン朝も、匈奴以来の草原遊牧民族国家の伝統によく見られた「両汗制」（東西２人のハンによる分割統治）を実行した。すなわち、長幼で東西に分け、東部は「アルスラン・ハーン」（「阿爾斯蘭可汗」、突厥語で「獅子王」の意）と称した大ハン（大汗）が直接統治し、首都をベラサグン（「巴拉沙衮」Balasaghun、現在のキルギスタンのトクマク（「托克馬克」））に置き、副ハン（副王、「副汗」）が統治する西部は首都を当初は天山北方の重要な貿易場であったタラスの町（「怛邏斯」Talas、現在のカザフスタンのジャンブル（ジャンブイル「江布爾」、Dzambul、Zhambyl）に置いた（のちカシュガルに移転した）。

３　サトゥク・ボグラ・ハンの改宗

９世紀に、中央アジアにはトルコ系のカラハン朝とイラン系のサーマーン朝という２つのイスラム政権が登場する。サーマーン朝（875～999年）は、トランスオクシアナやホラサーンを支配したイラン系王朝で、のちカラハン朝に滅ぼされるが、すでにイスラム化した王朝であった。国境を接していたこの両国は当初は平和共存していたが、その後、サーマーン朝がカラハン朝に対して「宗教戦争」（いわゆる「聖戦」）を仕掛けてくるようになった。893年、サーマーン朝はカラハン朝の副都タラス城を占領し、副ハンのオグルチャック・カディル・ハン（「奥古爾恰克・卡迪爾汗」）のお后と１万

5000人の兵士を捕虜とし（うち１万人を殺害）、ここにあったキリスト教会をイスラム・モスクに改装したという。タンロス城が陥落させられると、オグルチャック・カディル・ハンはカシュガル（「喀什　噶」）に移らざるをえなかった。これより、カシュガルはカラハン朝の副都となったのである。

タンロス城を攻略した後、サーマーン朝では内訌が発生した。内訌に敗北した王子ナスル･イブン・マンスル（「奈斯爾･本・曼蘇爾」、アイーブ･ナスル･サマニ（「艾布･奈斯爾･薩曼尼」ともいう）がカシュガルに逃れてきて、オグルチャック・ハンに保護を求めた。オグルチャックはサーマーン朝の内争を利用して、これに打撃を与えようと考え、ナスルの亡命を歓迎し、自分の誠意として彼をアルトゥシュ地区の行政長官に任命した。アルトゥシュ（Artux、「阿図什」アトシュともいう）は、カシュガル市の東北40ｋｍのところにある都市で、現在は新疆クズルス・クルグズ（「克孜勒蘇・柯爾克孜」）自治州の州都となっている（今日、Kyrgyzを「キルギス」とするのは誤称とされている）。

ナスル王子がアルトゥシュ地区行政長官になると、ムスリム商人たちがブハラやサマルカンド等から頻繁にアルトゥシュを訪れるようになった。オグルチャックはムスリム商人が将来する絹の衣類や蔗糖をとても好み、またナスル王子もつねにこれらのものを彼に貢いだ。信任を取り付けた後、ナスル王子はアルトゥシュにモスクを建立する希望を伝え、モスクを建立して「自分の主（アラー）をお祈りする」ために、牛皮の大きさ程度の土地がほしいと申し出た。オグルチャックは一貫して敵の宗教であるイスラム教を敵視していたが、ナスル王子に対する信任と誠意を示すために、この申し出を認めた。ナスル王子はアルトゥシュに帰ると、すぐに黄牛を一頭殺し、牛皮を細い紐に切って、この牛皮の紐で土地を囲み、そこに大モスクを建てた。これが新疆で最初に建立されたモスクとされており、14世紀に入った時でも、この「アルトゥシュ大モスク」（阿図什大清真寺）は依然として新疆で著名なモスクであったという。

イスラム教を信仰するナスル王子のアルトゥシュへの定住と、アルトゥシュ大モスクの建立はイスラム教が新疆に伝えられたことを示すメルクマールである。これは９世紀末か10世紀初め頃、中国王朝でいえば唐末から五代の初年のことであった。オグルチャック・ハンはサーマーン朝を敵視していたので、当然イスラム教の布教も厳禁していたが、政治的な必要からイスラム教を信仰するナスル王子を受け入れ保護した。が、予期しない結果としてイスラム教の新疆への流入をまねいたのである。事態はそれに留まらず、カシュガルのイスラム化およびカラハン朝全域でのイスラム教の伝播という新しい事態を招くこととなったのである。

サトゥク･ボグラ・ハン（Satuq Boghra Khan,「薩図克･布格拉可汗」、ボグラとは「雄駱駝」の意、901？～955/956年）は、カラハン朝の伝説上の初代大ハンであるビカチュエ・カディル･ハン（「闕毗伽･卡迪爾汗」）の孫であり、第二代バズル・アルスランハン（「巴沢爾・阿爾斯蘭汗」）の次子であった。早年に父を亡くしたサトゥクは、母とともにカシュガルで叔父のオグルチャック・カディル・ハンと生活を共にしていた。サトゥクはいつもアルトゥシュに行っては狩りをしたりムスリム商人が持ってくるものを見たりしていたが、その中でナスル王子と親しくなり、彼の影響と説教を受けて、12歳の時にイスラム教に帰依した。教名を「アブドゥ・クリム」（「阿不都・克里木」）とした。

イスラム教厳禁の中で、サトゥクはイスラム教入信を秘密にしたまま、密かにナスルから「コーラン」やイスラム教の知識を学びながら、汗族の中、とくに若者のなかに信者を増やしていった。かれが25歳の時に、「彼の周囲にはカシュガル（「可失哈耳」）の騎兵300騎が集い、さらにフェルガーナの支持を得て、総計1,000騎となった。さらに3,000騎にまで増大すると、かれはカシュガルを攻めて、イスラムの名を以てこれを征服した」という。こうして、サトゥクは25歳の時（915年？）に、イスラム勢力の助けを借りて、仏教を信ずる叔父のオグルチャック・ハンとの争いに勝ち、副ハンの位を奪い取った。サトゥクはカラハン朝で最初にイスラム教を受け入れた可汗（ハン）となり、新疆の歴

史においても最初のムスリム王となった。

サトゥクはカシュガル[注４]の支配権を握ると、ただちにイスラム教を合法宗教と宣言し、人々にイスラム教に改宗するよう呼び掛けた。当時、カラハン朝で主流だった宗教は仏教で、ほかの祆教やマニ教、景教、シャマン教（シャーマニズム）を信仰する人も多かった。そこで、サトゥクは旧来の宗教信仰を捨ててイスラム教に改宗させるために強制的な措置をとり、アラビア国家をモデルにしたイスラム法統治体制を樹立しようと、宗教法庭を設置したりした。それとともに、サトゥクはイスラム神学者たちに「サトゥクがイスラム教を受け入れた」ことは「神（アラー）」の「啓示」を受けたということであり、これは「真主（アラー）の思し召し」であると説教させた。こうして、カラハン朝の国家統治の中で宗教領袖が重要な地位を占めることとなり、宗教学者が増大し、イスラム教寺院が大きな経済力を持ち始めた。

これがこれまでのマニ教や仏教が主流であった新疆の地に、まだほんの最西部の一部地域にすぎなかったとはいえ、イスラム教が定着するその最初の契機となった。７世紀前半にカシュガルを旅した玄奘は、ここに多数の仏教寺院が存在したことを伝えていることに見られるように、当地はそれまで仏教がさかんであった。こうして、カシュガルの支配者となったサトゥクはカラハン朝の半分をまずイスラム教に改宗させて、カラハン朝イスラム化の先駆けとなった。

当時、サトゥクはカラハン朝の副ハンにすぎず、ベラサグン城にいる大ハンはまだイスラム教を受け入れているわけではなかった。カラハン朝全域でイスラム教を広めるためには、この大ハンを除く必要があった。そこで、サトゥクは、初めて「聖戦」の御旗を掲げて、ベラサグンに攻め入った。ベラサグンでは中原の王朝に救援を求めたが、成功せず、ついにイスラム暦331年（西暦942/943年）、サトゥク・ボグラ・ハンのイスラム軍はベラサグンを占領したといわれる。しかし、イスラム教がカラハン朝領内で順調に受け入れられたわけではなかった。その本拠地カシュガルにおいてさえも、主流だった仏教徒からの抗議運動が時に活発化していたのである。

サトゥクは955/956年にカシュガルで亡くなると、その入信の地、アルトゥシュに葬られた。のち11世紀以降になって、信仰の違い故にビシュバリク（北庭）の西ウイグル王国から完全に分離独立するに及んで、この王がさかのぼってカラハン王朝の「始祖王」と崇められた。かれの改宗伝説にはさまざまな奇蹟譚や神話的なエピソードが書き加えられ、16世紀にはサトゥク・ハンは預言者ムハンマドの霊魂から直接の導きをうけた者（ウヴァイスィー）とされ、アルトシュにあるその墓廟（スルタン・マザール）は崇拝の対象にされた。

その由来は、16世紀にホージャ･ムハンマド･シャリーフ（Khvaja Muhammad Sharif、1473 / 4 頃－1564/ 5 年）というスーフィーがカシュガルに来た時に、サトゥク･ボグラ･ハンの墓を「発見」して、サトゥクの霊魂から直接の教導を受けて、そのウヴァイスィーとなったという物語から始まった。幼少にして孤児となったムハンマド･シャリーフは、サマルカンドのマドラサで30年勉学した後、東トルキスタンにスーフィズム教団「ウヴァイスィー教団」を創始した。こうして、サトゥク･ボグラ・ハンはムハンマド･シャリーフの宗教的権威の源泉として崇拝されることとなったのである[注５]。

(注４) サトゥクが都をおいたカシュガルの位置は、入場券（旅游門票）によれば、現在のアトシュのクムサク（「庫木沙克」）とカシュガルの疏附県バイシュクラム（「拝什克拉木」）一帯であったという。

(注５) ホージャ･ムハンマド･シャリーフはモグール・ウルスのアブドゥッラシード・ハーン（1573/4年即位）の帰依を獲得し、その導師（ムルシド）となった。アブドゥッラシード・ハーンは軍事行動に際しても、彼を通じて聖者たちの霊魂から援助を得たという。彼の後継者も一時期は影響力を有したが、やがてカシュガル・ホージャ家の登場により勢力を失った。しかし、トルファン盆地やイリ渓谷には、この教団に従う者が存続した。『岩波イスラーム辞典』892頁。

彼はウイグル族の英雄とされており、現在でもその陵墓はアトシュ郊外、中心地から2kmほどの村落の中に「スルタン・マザール」(「蘇勒坦麻扎」、全称は「蘇里唐・薩図克・博格拉汗麻扎」）として存在しており、新疆ウイグル自治区の文物保護単位に指定されている。現在の建物は1996年に拡張・修復されたもので、主建築は1,000年前の建立時（10世紀）と同様の風格・規模を保持している。私は2007年9月16日（日）ここを訪問した。今日も美しい墓廟が残されており、すぐ隣には大きな正門を持った立派なモスクと経学院らしき建物があり、保存に大きな努力がかけらていることは窺えたが、訪れる人はおらず、寂れている或いは抑圧されているという印象を受けた。それは、アトシュで「イスラム解放党を撲滅せよ」というスローガンを見かけたので、イスラム原理主義あるいはウイグル独立運動と何らかの関連があるものと推測される（論文最後の写真を参照)。

4　ムーサ・アルスラン・ハンによる強制改宗

955年にサトゥク･ボグラ･ハンが亡くなり、その子のムーサ･アブドラ･クリム（全称は「穆薩･阿爾斯蘭可汗・本・阿不都（阿卜杜勒）･克里木（凱里姆)」、突厥語名はバイタシュ「巴伊塔什」）がハン位を継承した。カシュガルはイスラム信者が比較的多い地区であったが、多くは強制的な改宗だったため、多くの人の態度は信じたり背いたりであった。時に改宗に反対する暴動も発生する有様であった。カラハン王朝が進めるイスラム教の強制改宗や仏教徒弾圧というやり方は、仏教・景教・マニ教などの教徒たちから強烈な不満と激しい反抗を引き起こしただけでなく、仏教を信奉する于闐李氏王朝と高昌回鶻王国の不満を引き起こし、カラハン朝とこの近隣の両国との関係を悪化させた。また、サーマーン朝はサトゥク・ボグラ・ハンによるタラス回復の戦いで一時的に敗北したとはいえ、依然としてカラハン朝にとって大きな脅威であった。

ムーサは対外的に進出する前に、まず国内の体制を固めることに精力を注いだ。彼は副ハンの統治区内で引き続きイスラム教への強制改宗を進め、自分の支配的地位を固めた。続いて、ムーサは「真主を信じない」ベラサグンの大ハンに「聖戦」を挑み、大ハン国の都ベラサグンを一挙に占領して大ハンを廃し、東西の境域を統一した。

ムーサはこれよりカラハン朝の大ハン「アルスラン・ハン」となり、カラハン朝の世系もこれ以後サトゥク・ボグラ・ハン一族に移っていった。また、ムーサ・アルスラン・ハンはベラサグンを副都に降格させ、兄弟のスレイマン・イブン・アブドゥ・カリム（「蘇来曼・本・阿不都･克里木」）を副ハンに任命した。自身はカシュガルに戻り、カシュガルをカラハン朝の正都に昇格させた。こうして、カシュガルは王朝の政治的経済的文化的宗教的中心となり、繁栄していった。

サトゥクにしろ、ムーサにしろ、かれらがイスラム教を受け入れたり保護したりしたのも、政治闘争の必要性から出たものであるといえる。権力者の宗教に対する態度は、個人の好悪からではなく、大体が自己の支配を維持するのに有利かどうかから出発するものである。サトゥクがイスラム教を受け入れたということは、カラハン朝はこれからはサーマーン朝から「聖戦」を口実として攻撃を受けることを防いだということでもあった。また、サトゥクがイスラム教に改宗した時には、中央アジアの多くのトルコ系諸族がイスラム教を受け入れており、遊牧民族の草原ではスーフィズム宣教師が熱心に布教活動を行ない、またムスリム商人も頻繁に遊牧民族と交易を行なっていたのであるから、カラハン朝自身もすでに直接・間接にイスラム文明の影響を受けていた。サトゥクはいわばこの潮流に順応したに過ぎないともいえるのである。

また、イスラム教の特色についていえば、カラハン朝で流行していた仏教・祆教・マニ教・シャーマニズム等の宗教と較べて、イスラム教は信徒に対する結集力・アピール力・拘束力が強く、とくに「聖戦」とか「殉教」の精神は権力者にとって自身の支配を維持し勢力を拡大する手段として活用しやすいものであったことも、サトゥクやムーサのイスラム教重用の理由であった。

ムーサは、イスラム勢力を自己の重要な支持基盤であると考え、王位争奪戦のなかでイスラム教を大ハンの支配地にも広めるために、強制改宗政策を推し進めるとともに、イスラム上層勢力と密接に協力してイスラム教宣教運動を起こし、イスラム教の布教活動を加速させた。この運動では、布教に情熱を注ぐニーシャープール（「尼沙不耳」、イラン北東部ホラーサーン地方の町）のスーフィズム系伝道師、スーフィー・カリマティ（「蘇非・卡里馬提」）が大きな役割を果たした。かれは中央アジからカシュガルに来て、「諸ハンのハン」たるムーサ・アルスラン・ハンの宗教顧問となり、宣教運動を組織し指導した。

この宣教運動は大きな成功を収め、アラブ歴史家イブン・アルアシール（「伊本・阿西爾」Ibn al-Athir、1160-1233）の大著『完史』（「全史」）によると、約960年頃にチュー河畔の20万帳のトルコ系遊牧諸民族をイスラム教に改宗させたという。一つの帳（テント）を３～４人と計算すれば、この一年だけで60～80万人がイスラム教を受け入れたということになる。この数字はいささか誇張されたものであろうが、この宣教活動を通じて、イスラム教がカラハン朝のほぼすべての人たちに受け入れられ、仏教に代わってカラハン朝の主要な宗教になったと認められる。ムーサは同年、イスラム教を国教と定めた。新疆地方の政権で歴史上初めてイスラム王朝が出現したのである。こうして、ムーサの支配期に、イスラム法による統治が大々的に押し進められて、王朝領土の各地にあまねく宗教法庭が設置され、また清真寺（モスク）や経文学校（マドラサ）、マザールを建立されたりした。そのうち、今日もカシュガルには「王家経学院」の遺跡が残されている。

５　イスラム教対仏教の第一次「宗教戦争」：ホータン征服

カシュガルにイスラム教が定着し始めると、新疆タリム盆地の南部はカラハンのイスラム王朝と于闐（和闐、ウテンU-thenはチベット人による呼称）の仏教王朝が併存する状況となり、10世紀中期から11世紀初めまで約40数年間、両国間で直接的な「宗教戦争」が勃発することとなる。于闐王国（ホータン Khotan 王国）はイラン系言語（ホータン・サカ語）が用いられ、古くからイランからのゾロアスター教が流行し、やがてインドからの仏教が栄えていたところであった。すなわち、人種的にはアーリア系、文化的にはインド・イラン的なオアシス国家であった。

すでにサトゥク・ボグラ・ハンの時代に、王公大臣や属民たちに改宗を迫ったため、仏教徒の不満と反抗を招き、首都カシュガルの仏教徒は何度も強制改宗反対の暴動を起こしていた。于闐王国の仏教徒がこの暴動を支持したため、両国関係は次第に悪化していった。また、カラハン朝はカシュガルを中心にして、新疆の東北や東南方面に勢力を拡張しようと、エンギサル（「英吉沙」）やヤルカンド（「葉爾羌」、現在のシャチョー「莎車」）に進出をはかった。

960年にカラハン朝は国家イスラム化を完成させると、ムーサ・アルスラン・ハンは于闐王国の仏教地区に対する「聖戦」の行動を起こした。これに対して、962年に于闐が出兵し、ここに「宗教戦争」が開始された。当初、于闐は同じ仏教徒の高昌回鶻王国（西ウイグル王国）と吐蕃王国（チベット王国）の支援を受け、優勢を占めていた。当時強盛を誇った高昌回鶻王国は仏教を信仰すること数百年に及び、かつカラハン朝の世々代々の敵となった。吐蕃はラダック（「拉達克」）および西部領土に定住していた、明らかにトルコ系と思われる首領を通して、本来はライバルであったはずの于闐を支援したと、スタインは述べている。

969年（宋天尊３年）９月に、于闐王の「尉遅蘇拉」（ヴイジャヤ・スラ Vijaya）が率いる于闐軍がカシュガルを攻略した。カラハン朝のハン（Tazik Tsun Hien、「大石・桑・海因」）は逃走し、その「宝物、妻子、大象、良馬」が于闐の獲得するところとなり、于闐の王宮に持ち去られた。于闐

はカシュガルに別の政府を立て、勝利の報告を沙州大王・帰義軍節度使の曹元忠と宋朝に行ない、また戦利品を貢ぎ物として宋朝皇帝と曹元忠に献じた。『宋史・于闐伝』に記されている、于闐僧吉祥が納めたという「舞う象」は、明らかにこの戦争で獲得された大象であろう。史籍にはこの宗教戦争に関して残されている記述が少なく、いまだ明らかでないところが多いとされてきたが、現在はフランスの東洋学者ペリオ（「伯希和」）が敦煌で入手したホーテン語（和田文、中世イラン語の一種サカ語）の書簡「于闐王尉遅蘇拉与沙州大王曹元忠書」によって、この戦争の詳細についていささか知ることができるようになっている。

その後、戦争は膠着状態にあったが、時に戦闘が発生することがあり、カラハン朝の多くの王族や将領が戦死し、「シャヒード（殉教者）」（「舎希徳」）となった。その中で最も有名なのが大ハンのアリ・アルスラン・ハンである。

998年、于闐国の３万の大軍が再びカシュガル城下に迫った。カシュガルは長期にわたる包囲により城内で飢餓が発生したため、アリ・アルスラン・ハンは城を出て背水の一戦に打って出た。于闐軍は敗退し、エンギサルにまで退いた。アリ・アルスランは追撃し、両国軍はエンギサルのウダカラ（「烏達卡拉」）で激戦を戦った。于闐軍は相手軍が礼拝している間隙を縫って襲撃した。カラハン朝軍は大敗し、アリ・アルスラン・ハンは戦死した。アリ・アルスラン・ハンはカシュガル郊外のカラハン朝王家墓地に葬られ、「アルスラン・ハン・マザール」として現存している。また、その戦死した地には「オダム・マザール」（「奥達木・麻扎」）という紀念塚がムスリムたちによって建立された。

アリ・アルスラン・ハンの死後、息子のアフマド・イブン・アリ（「阿赫馬徳・本・阿里」）がハン位を継承し、「トゥガン・ハン」（托干汗）と称した。まもなくカシュガルで再び仏教徒による暴動が発生すると、于闐軍が再度出兵し、一挙にカシュガル城を占領した。

トゥガン・ハンは、出兵救援を要請するために、ハサン･ボグラ・ハン（「哈桑･布格拉」）とユースフ･カディル・ハン（「優素福･卡迪爾汗」、サトゥクの孫）をサーマン朝の首都だった中央アジアのボハラ（「布哈拉」Bokhara）に派遣した。この時、３代目ナスル・イリク・ハンが率いるカラハン朝軍は西トルキスタンに進出し、マー・ワラー・アンナフルを制圧して、サーマーン朝との戦争で勝利を収め、サーマーン朝をあと一歩で滅亡（999年滅亡）というところまで追い込んでいたので、カシュガル支援のために兵力を割くことができた。

こうして、イスラム教聖裔、ブハラの宗教指導者ムハイディン（「穆哈伊丁」）ら４人のイマームが徴募した４万（一説には２万４千）人のムスリム志願軍の援助を得て、カラハン朝軍は于闐軍を大敗させ、カシュガルを回復した。ユースフ・カディル・ハン率いるカラハン朝軍は引き続きこれを追撃し、于闐軍を破ってヤルカンド（「葉爾羌」）や「カルガリク」（葉城）を占領し、さらに于闐城下に迫った。于闐の軍民と仏教徒は孤立無援のなか頑強に抵抗したが、カラハン朝軍は長期の包囲をした後、1006年（1001年、1009年説もある）に于闐城を陥落させて、于闐の李氏王朝を滅亡させた。イスラム占領軍は于闐城に対して壊滅的な破壊を加えたが、寺廟や尼庵は破壊せずにモスクに改造した。于闐城は更地となるほどの廃墟と化した。古代のホーテン都城、西山城の跡地とされるヨートカン（Yotkan）遺跡も現在では耕地となって、何も残っていない。ただ遺跡の中央を流れる小川からは、テラコッタの小像が多数出土する。

こうして、ユースフ・カディル・ハンが于闐（現在のホータン）の最初のイスラム統治者となった。ここにイラン的仏教的ホータンのトルコ化・イスラム化が開始された。1009年、ホータン王から北宋に朝貢の使者が遣わされたが、その時の王は「黒韓王」と称していた。この王号は「カラ」（黒）＋「ハン」（韓）と解され、カラハン王として宋に朝貢したものと見られ、すでにカラハン朝が

ホータン（于闐）を支配し、ホータン王を称していたことを示していよう[注６]。

于闐城の陥落後も、四散した于闐軍は各地の住民や仏教徒と一緒になってイスラム占領軍に対して長期間の抵抗を行ない、イスラム軍の将領を戦死させることもあった。あるイスラム将領が于闐の山間で戦死したことを聞いたユースフ・カディル・ハンはカシュガルより遺体の収容に来たという。現在の于闐努勒村のディシヘイラ・マザール（「地細黒剌・麻扎」）がそれである。

それから40年経った頃、1049年にユースフ・カディル・ハンが死去すると、再び反乱が起きた。現在の策勒県のボスタン（「波斯坦」）地方のある戦闘で、ボハラからムスリム志願軍を率いてきた４人のイマームが反乱軍によって殺害された。彼らの墳墓「四イマーム・マザール」は今日に至るまで存在している。策勒県には「ウズンタト」（「烏尊塔特」）という地名のところがあるが、その地名は「長期にわたって異教を堅持していたところ」という意味である。こうした地名や現在でもしばしば眼にすることができる多くのマザールは、いかに仏教徒の抵抗が根強く長期間にわたっていたか、抵抗運動の時間的長さと戦闘の激烈さを伝えるものである。

仏教徒による抵抗が最終的に失敗すると、イスラム教を受け入れることを拒否した仏教徒たちは異国他郷に逃れるほかなかった。『西蔵伝』によれば、「于闐国の宰相が仏法を信じず、僧舎を掠奪するので、仏教徒たちはツァンモー（賛摩）大寺に集まってこの地を去ることを決定し、徒歩で西蔵（チベット）に向かった」という。引き続き于闐にとどまった僧侶や仏教を信じる住民もいたが、かれらは密かに仏法の保護を己の任とするほかなかった。

このように、于闐仏教徒および仏教を信仰する住民によるイスラム占領軍に対する抵抗は、大体半世紀に及んだ。これに、于闐陥落までの40年余りのカラハン・于闐戦争を加えれば、期間は１世紀近くという長さであった。ゆえに、今日でもホータン（和田）の民間には「百年の宗教戦争」という言い習わしがある。また、イスラム教徒からは「殉教のホータン」と呼ばれた。

こうした長期間の宗教戦争を経て、カラハン朝は境域を約昌城以東（現在の若羌県内）にまで広げ、古来から1000年あまりの歴史を持っていた仏教聖地・于闐をイスラム化した。これ以後、イスラム教はホータンやヤルカンドなどタリム盆地の西部や南部各地、いわゆる旧「西域南道」のオアシス都市（「南疆六城」「アルティ・シャフル」Alty-Shahrと称せられる）にも伝わり、新疆でのイスラム教対仏教の勢力図を塗り替え、新疆におけるイスラム教の地位を３割程度固めた。

が、同時に、100年にもおよぶ宗教戦争は、タリム盆地の西部と南部の社会経済に極めて甚大な被害と計り知れない損失をもたらし、人口の大量死と都市の衰退を招き、生産力は大きく破壊され、経済は長期低落に陥ることとなった。戦争は多くの人々をあるいは砂漠の中で戦死させたり、あるいは流浪させたりして、今に至るもカシュガルからホータンへの沿道には、とくにエンギサルや策勒など当時の主戦場では、至る所に荒塚が累々とならび、マザールに埋められている。これらのいわゆる「シャヒード・マザール」は、当時の戦争の中で死去したムスリム官兵のほんの一部分の人の墳墓にすぎず、大多数の人はこうした土を盛り上げた小山さえ残していなかった。そして、同じくらいの或

（注６）江上波夫編『中央アジア史』山川出版社、1987年、413頁。この事例に見られるように、カラハン朝と宋朝はずっと友好・朝貢関係を保持しており、往来が絶えなかった。カラハン朝は東方王朝の伝統を保持しようとつとめ、たとえば大ハンの鋳造した貨幣にはつねに「桃花石・ボグラ・ハン」や「秦之王」、「秦と東方之王」などの称号が刻まれていた。「桃花石」や「秦」は、当時の中央アジアに対する中国の呼称であった。カシュガル人マフムード・カシュガーリーの書いた『突厥語大辞典』や中世のアラブ・ペルシアの文献には、カシュガルと宋、契丹（キタイ）を並列していることが多く、西方の人は中国をこの３つの地域から構成されていると見ていたのである。なおホータン（コータン）やヤルカンドの名は10世紀からのイスラム史料に始まる名前である。

いはさらに多くの仏教徒たちの屍は、とっくに灰となって飛び散ってしまっている。これ以後、ホータンはそれまでの国際性を失い、歴史の中心舞台に登場することはなくなるが、それほどの大打撃を被ったのである。

6　高昌仏教王国に対する第二次「宗教戦争」の失敗

于闐仏教王国に対する勝利は、カラハン朝の野心と宗教的熱狂をさらにかき立てた。于闐に対する宗教戦争をまだ戦っている時に、カラハン朝はタリム盆地東部のトルファン盆地にあって旧「西域北道」の中心地であった高昌仏教王国に第二の「宗教戦争」を仕掛けた。高昌回鶻王国もカラハン朝と同様に、9世紀半ばに西走した回鶻人が建国した王国であった。が、それぞれ仏教とイスラム教という異なった宗教を信仰するに至ったため、両王国は対立状態にあった。そこに、カラハン朝による于闐王国への「聖戦」が引き起こされた際、高昌回鶻王国は同じ仏教徒の于闐王国を支援してムスリムと戦った。

于闐王朝の滅亡後には、東方のウイグル的トルファン政権、高昌王国が新疆でのイスラム教布教にとってカラハン朝の次なる最大の障壁となり、両国関係は日増しに緊張していった。カシュガルのアフマド・トゥガン・ハンは実のところ、于闐との宗教戦争やサーマーン朝との戦争に貢献していなかった。白熱化する王家内での内部闘争の中、トゥガン・ハンは別の「宗教戦争」（聖戦）の勝利によって自己の地位を固める必要があった。そこで、かれは全力で「突厥人（トルコ人）や東方の異教徒」（つまり、ビシュバリクの西ウイグル王国・高昌回鶻王国）に対処せんと、晩年に多くの遠征を行なった。

1017年、ついにカラハン朝軍は高昌回鶻王国を攻撃した。が、その軍隊はカラハン朝の正都であった、トルファン（高昌）以南のカシュガル方向から攻めて来たのではなく、イリ河の北から、つまり副都に格下げされていたベラサグン地域から進撃して来たのである。高昌回鶻王国軍はこの攻撃に対して強く反撃に打って出て、侵入したイスラム軍を撃退した。そして、10万帳（一説には30万帳）と伝えられる回鶻軍がカシュガル地域へと追撃を続け、さらにはセミレチエ（七河流域）に侵入し、都のベラサグンからわずか8日の行程のところまで迫った。カラハン朝は、大ハンのアフマド･トゥガン･ハン（「艾哈邁徳･托干汗」）が病を抱えながら先頭に立って「最凶悪な異教徒」たる敵（トルコ人やカラキタイ人）を迎え打ち、侵略者を撃退した。トゥガン・ハンは勢いに乗じてトルファンの地まで反撃し、カラハン朝軍は20万人あまりを殺害し10万人を捕虜とするという大勝利を収め、また大量の戦利品を獲得した。トゥガン・ハンは帰還した後、その信仰のために「感情的な抑圧」を受けて病死した。アフマド・トゥガン・ハンによる、この反撃は詰まるところ失敗に終わり、高昌回鶻王国に対する第二次「宗教戦争」は成功せず、タリム盆地東部のイスラム化は300年間ほど遅れることとなった。しかし、この「カラハン･高昌宗教戦争」によって、再び大量の人口が死亡し、高昌地区（トルファン）の仏教文化は大きな破壊を被った。

トゥガン・ハンの死後、カラハン朝ではさらに激烈な内部争いが起こり、高昌回鶻王国に対する宗教戦争は棚上げにされた。ユースフ・カディル・ハンがハン位を継承した後には、カラハン朝はカズニ朝（「伽色尼王朝」）との中央アジア争奪戦に巻き込まれた。1032年、ユースフ・カディル・ハンが死去した後、大体1047年頃にカラハン朝は完全に東西のハン国に分裂した。両ハン国は休みなく衝突と戦闘を繰り返していたので、もはや高昌回鶻王国に対する「聖戦」を起こすことはできず、962年に開始された「宗教戦争」とそれに伴う武力宣教活動もここに一旦終結となったのである。

カラハン朝の統治体制は当初より極めて分封的であり、王族が各地に割拠しており、カラハン国家

は非常に分散的な多民族多部族連合体と呼んでよい性質の王国であった。カラハン朝は11世紀半ばに東西に分裂する以前から、パミール高原（葱嶺）を夾んで、カシュガルを中心とする東部ハサン系（東支哈桑系）とフェルガーナのサマルカンドを中心とする西部アリ系（「阿里系」）に、事実上の分裂をしていた。一時、アリ系のナスル・イリク・ハーン（「伊力可汗」、998～1012年）が999年にボハラを陥落させてサーマーン朝を最終的に滅ぼしていることに見られるように、西ハン国が勢力を誇った時もあるが、カラハン朝の東西ハン両国による相互の攻防は長期間にわたった。

カラハン朝の東西両ハン国は、1089年バルハシ湖北方のトルコ族オグズからおこった新興のセルジューク＝トルコに臣属し、やがて12世紀半ばカラキタイ朝がこれに取って代わった。東カラハン国は1132年、東から来た契丹人の西遼（カラキタイ、1132～1218年）に臣従した。ベラサグンはグズ＝オルダ（フスオルダ、「虎思斡児朶」）と改められた（これがカラキタイ朝の建国とされる）。「新疆」東部地域の西ウイグル王国もカラキタイに征服され、いまだイスラム教とは異なる宗教信仰を持っていた回鶻人（ウイグル人）も支配下に入った。

カラハン朝東ハン国は、1211年西遼の王位を簒奪したナイマン部のクチュルク［「屈出律」］にカシュガルを占領されて滅ぼされた。翌年には西ハン国がホラズム・シャー（「花剌子模沙」）王朝（約1077～1220/1231年）の君主アラディン・ムハンマドに滅ぼされ、カラハン朝は終わりを遂げた。

西遼（カラキタイ）の上層人士は仏教を信仰していたが、クチュルク支配期のイスラム弾圧ほどには他の宗教に対して厳しい排斥はしなかったが、カラキタイ朝が存続していた約100年間は、これがイスラム東漸にたいする防波堤の役割を果たし、東トルキスタンのイスラム化は勢いを失うことになった[注7]。

7　カラハン朝のトルコ・イスラム文化

東西分裂後の東カラハン朝は文化史上特筆すべき業績を残した。それは、東隣のトルファン・ウイグル王国（高昌回鶻王国）で栄えたトルコ・仏教文化に対して、トルコ・イスラム文化の育成者としての歴史的意義である。東カラハン朝では大ハンのハサン・イブン・スレイマン（1074～1102年、「哈桑・本・蘇莱曼」）が「正義と宗教の保護者」と称し、アッバース（「阿拔斯」）朝を正統と奉じて、引き続きイスラム統治を行っていた。

そのスレイマン時代の1069年（1070年）、首都カシュガルで宮廷人として過ごしたベラサグン生まれのユースフ・ハーッス・ハージブ（Yusup Khas Hajip、「玉蘇甫・哈斯・哈吉甫」）が１年半の歳月をかけて君主のあるべき姿、主君の守るべき道徳的心得を説いた『クタドゥグ・ビリグ（幸福になるために必要な知識）』を書いて、スレイマン君主に献呈した。この功によりハージブはカラハン朝の大侍従に任命された。

この書物は一種の教訓・道徳書であるが、アラビア文字を用いたカラハン朝トルコ語の韻文で書かれ、現存するトルコ・イスラム文学最古の作品であるとされている。その内容は当時の結婚観、社会構成の記述など多岐にわたり、11世紀トルコ人社会に関する百科事典として利用することも出来る貴重な歴史史料でもある。現在、ハージブはウイグル人の文化的英雄として再評価され、美しい墓廟（「玉蘇甫・哈斯・哈吉甫麻扎」）が再建されている。かれは死後カシュガル郊外に埋葬されたが、その後トマン川（吐曼河）の氾濫を避けて、現在地であるカシュガル市第十二小学校の敷地内に移された。

また、1074年に完成した『ディワン・ルガート・アッテュルクDivan Lugat at-Turk（トルコ語辞典）』の著者マフムード・カシュガーリー（Mahmud al-Kashgari、「馬赫穆徳・喀什噶里」）も、カシュガル生まれのトルコ人で、父フセインはカシュガル・バルスガンBarsgan地方出身の貴族であった。カシュガーリー

[注7] 前掲書『中央アジア史』417頁。

はバグダードで教育を受け、アラビア語がよくできた。この辞書もバグダードで書かれたと思われるが、史上最初のトルコ語・アラビア語辞典である。語数は約7,500語で、アラビア語の音韻論に則ってトルコ語の単語を配列し、それをたんにアラビア語で説明するだけでなく、それがどの方言から採録された単語であるかを示し、往々にして民謡や格言からなる文例を示している。ペルシア語、チベット語、中国語からの借用語はあっても、アラビア語からの借用語はほとんどないという。内容は、たんなる辞典というよりも、テュルク系諸民族の分布およびヴォルガ河流域から東南ヨーロッパにかけての諸民族の歴史・地理・神話・民俗などの情報を多く含み、百科事典といった方がよい。カシュガーリーは現在の新疆ウイグル自治区で、ウイグル民族の文化英雄とされ、80年代の初めにはその「墓」が発見されて、政府の認可のもとに新たな墓廟がガシュガル近郊の疏附県に建設された(注8)。

おわりに

中国内地（中国本土）におけるムスリム社会の起源は、唐宋時代に西アジアや中央アジア（いわゆる広義の「西域」）から中国内に商業などのために来たアラブ人やペルシア人の貿易商人たちであった。元代には西方（西域）出身者が「色目人」として中国人（漢人や南人）よりも重用されたため、さらに多くのムスリムが兵士・官吏・職人・商人・奴隷として中国に移住してきた。かれらが「回民」「回回」として中国社会に定着し、とくに明代以後、イスラム教に対して抑圧的な社会風潮のもとで中国語の使用や漢族との通婚など、漢族との融合・同化を繰り返す中で漢族などからも多くの改宗者を獲得しながら、中国ムスリム社会がいわば歴史的自然的に形成された。かれらは現在すでに、容貌や言語の面においてその本来持っていた特質を喪失し、イスラム教信仰とそれに伴う風俗習慣を除くと、ほぼ完全に漢族（いわゆる中国人）に同化している。この「中国人イスラム教徒」というべき人間集団は、中華人民共和国政府から「回族」という民族名称を承認され、政府認定の55の少数民族の中の有力な少数民族として政界・財界・文化界各方面で活躍している。

それに対して、「新疆」におけるイスラム教の普及は中国内地のような平和的自然的なものではなく、「聖戦」という名の下での「宗教戦争」や武力宣教活動、強制改宗措置といった強圧的な手段を伴うものであった。東トルキスタン（南疆）のイスラム化は、仏教徒の長期にわたる頑強な抵抗運動を鎮圧しつつ進められたのである。したがって、この南疆（タリム盆地西部・南部）におけるイスラム「宗教戦争」は、イスラム教徒側にも仏教徒側にも多くの犠牲者を生んだ。そしてホータン（于闐）にたいする宗教戦争は、この地域に計り知れない人的経済的損失を与えて、「西域南道」という東西交易ルートの役割をほぼ完全に消滅させるほどの大打撃を残したのである。その被害は人工的なものであったが、ロプ地域の乾燥化による一部オアシス都市の消滅につぐものであった。

また、新疆のイスラム教各教派集団は時には血なまぐさい流血と陰謀をともなう、非常に激しい教派対立をしばしば巻き起こした。中国イスラム教は50以上の教派に分かれているといわれているほどに、分裂・対立の側面も根強い。「四大門宦」という中国独特の教派集団の形成にも、新疆イスラム教のスーフィズム的特質（一番大きなものはカシュガル・ホージャ家）が大きく関わっているが、それについては別に論じよう(注9)。新疆でのイスラム教の普及・発展の最大の特徴は、まさに上記に述べた点である。

［本稿は、国際学部2007年度共同研究「中国の改革開放政策とムスリム社会の対応―新疆ウイグル自治区の現地調査」(代表＝中村緋紗子)による研究成果である］

(注8)『アジア歴史事典・第2巻』平凡社、1959年、166頁。『岩波イスラーム事典』259頁。

(注9) 中国内地における中国イスラム教の各教派、「三大教派・四大門宦」と総称される宗派については、拙稿「中国におけるイスラム教教派」『文教大学国際学部紀要』第11巻第2号、2001年2月、129－155頁、を参照。

スルタン・マザール（2007年９月16日撮影）

モスク内の建物

スルタン・マザール隣のモスクの正門